

名古屋外国語大学のポルトガル語授業実践報告

A Practice of Portuguese Classes at Nagoya University of Foreign Studies

瀧藤千恵美
Chiemi TAKITO

1. はじめに

本報告では、名古屋外国語大学複言語プログラムにおけるポルトガル語の授業内容の概要、受講学生に対するアンケート結果とその考察、またそれらを踏まえての今後の授業運営に対する課題を述べていく。

2. ポルトガル語の授業概要

筆者は2017年度では木曜2限に初級文法の「ポルトガル語A-1(前期)、A-2(後期)」、木曜1限に初級会話の「ポルトガル語B-1(前期)、B-2(後期)」、水曜3限に中級文法の「ポルトガル語A-3(前期)、A-4(後期)」、水曜4限に中級会話の「ポルトガル語B-3(前期)、B-4(後期)」を担当した。

ポルトガル語の授業で使用している教科書は、初級クラスでは『生きたブラジルポルトガル語・初級』(兼安シルビア典子著・白水社)、中級・上級クラスでは『生きたブラジルポルトガル語・中級』(兼安シルビア典子著・白水社)である。ポルトガル語の大学用教科書は種類が少ない中、名古屋外国語大学ではほとんどの学生が中級まで受講するため、2年間基礎文法をじっくり学習できる本書を教科書として採用している。なお、東海地方にはブラジル人が多く住んでいることから、学生が将来的にポルトガル語を使うとすれ

ばブラジル人相手であろうことが予想されるため、ブラジルで使われているポルトガル語を教えている¹。

初級クラスの前半では、英語にはない基本的な概念に慣れさせるため、名詞・形容詞・指示詞・所有詞などに見られる性数変化に時間をかけ、また規則動詞の直説法現在形の活用にも触れる。後半では、日常会話で頻繁に用いられる不規則動詞の直説法現在形の活用を中心に学習する。初級での最終的な目標は、簡単な自己紹介を言えるようにすることである。

中級では、目的格人称代名詞・関係詞・比較最上級と、直説法の時制（完全過去形、不完全過去形、現在未来形、過去未来形、完了時制）を学習する。中級での目標はポルトガル語で日常の出来事を言ったり書いたりできるようになることである。

初級、中級共に、文法の授業では教科書に沿って文法事項を覚えさせ、会話の授業ではその学習した文法事項を用いた会話や作文を練習に取り組んでいる。また会話クラスでは学生がブラジルに対して興味や関心を持つように、授業の中で映像を見せている。初級クラスでは主にブラジルの地理や文化²を、中級クラスではブラジルの日系移民や在日ブラジル人についての内容³を取り上げた。

3. ポルトガル語学習者の受講動機—初級受講者へのアンケートより—

そもそも学生は、何を理由にポルトガル語を受講しようとしたのか。筆者は毎年初級クラスの授業初回時に「ポルトガル語を受講しようと思った理由・きっかけ」を学生にアンケート形式で尋ねている。名古屋外国語大学での過去3年間（2015～2017年度）の主な回答結果は以下の通りである。アンケートの回答者数は、2015年度41人、2016年度42人、2017年度53人の計136人となっている。

- ・将来役に立ちそう：31人
- ・ポルトガル語に興味があった：19人
- ・友達や先輩のすすめ：16人

- ・ 友達がブラジル人だから：15人
- ・ 地元や近所にブラジル人がいる：11人
- ・ ブラジルやブラジルの文化に興味がある：9人
- ・ ブラジル人なので、ちゃんとポルトガル語を学びたい：9人
- ・ スペイン語を学習していた、スペイン語に似ているから：9人

受講理由の1位である「将来役に立ちそう」で特に多く見られた意見は、「将来学校の先生になりたいので、児童生徒にブラジル人がいた時に話せたら役に立つ」「ポルトガル語を話せると教員採用試験に有利」というものであった。また136人のうち、ブラジル国籍を有する学生は12人いたが、ほとんどが日本で生まれ育っているため、ポルトガル語は少し話せるが学習経験がない、あるいはまったくポルトガル語を理解できない、という理由からポルトガル語を選択している。

他にもアンケートでは「今までブラジル人やポルトガル語に接した経験はあるか」の問いを設けており、これには全体の半数を超える71人が「ある」と答えている。どんな経験かの主な内容は次の通り（複数回答あり）である。

- ・ クラスメイトや友達にブラジル人がいる：36人
- ・ 地元、近所、バイト先でブラジル人をよく見る：17人
- ・ 親や親戚がブラジル人である：12人
- ・ 留学中にブラジル人の友達ができた：11人

ポルトガル語を受講する学生の過半数が、それまでにブラジル人と接した経験があり、少なからずブラジルやポルトガル語に興味を持ったうえで受講していることが分かる。実際、受講生の9割が愛知県・岐阜県・三重県・静岡県⁴の東海地方出身者であり、在日ブラジル人の半分以上はこの地域に居住している⁴。ブラジル人が身近にいる環境では、ポルトガル語に接する機会も多く、それによりポルトガル語への興味、学習動機へとつながっていると推

測される。

4. 学習者の感想—中級受講者へのアンケートより—

今回2017年度に中級B-4を受講した学生35人中28人にアンケートを取り、「ポルトガル語を学習していて難しいと感じたところ」「学習していて簡単だと思ったところ」「ポルトガル語を勉強していて良かったこと」の3点について自由記述で答えてもらった。なお、全ての学生が初級と中級で筆者の授業を2年間受講している。

(A) ポルトガル語を学習していて難しいと思ったこと

最も多かった意見は「動詞の活用」で15人が回答している。ブラジルで一般的に話し相手を指す「あなた (você)」という単語はポルトガル語では3人称扱いになるため、ブラジルポルトガル語の教科書には通常2人称の活用は載っていない。そのため名古屋外国語大学の授業でも動詞の活用は1人称単数・3人称単数・1人称複数・3人称複数の4つしか教えないのだが、英語しか外国語を学んだことのない学生にとっては、主語に応じて動詞を変化させることに困難さを感じたようである。次いで多い意見は「時制」(10人)、「名詞や形容詞などの性数変化」(7人)であった。これらは同じヨーロッパ言語にも共通する意見なのではないかと思う。今回は中級でアンケートを取ったため、当初予想していたよりも「性数変化」を挙げた学生は少なかったが、ポルトガル語特有の使い分け、具体的には「完全過去と不完全過去」、「(英語のbe動詞にあたる) ser動詞とestar動詞」、「(可能を意味する) poder動詞、saber動詞、conseguir動詞」、「(「知っている」という意味合いの) saber動詞とconhecer動詞」の違いに多くの学生が苦しめられていたようである。

(B) 学習していて簡単だと思ったところ

「学習していて(英語と比べて)簡単だと思ったところ」の問いには、ほとんどの学生が「ない」と答えていた(21人)。やはり英語に慣れ親しんだ学生にとっては、日本語や英語にない概念を学習することに困難さを感じて

いたようである。回答で挙げたものは「単語の読み方・発音」(5人)である。英語と違い、ポルトガル語は文字の並びで読み方が決まっているので、その決まりを覚えさえすれば簡単に読めるようになる。しかし多くの学生は英語を長年勉強しているためか、英語の読み方に引きずられてしまうところもあったようだ。そのため、この回答を挙げた学生は少数にとどまったと思われる。また「英語と似ているのでなんとなく意味の分かる単語が多かった」(1人)「英語に比べて疑問文が作りやすかった」(1人)という意見もあった。

(C) ポルトガル語を勉強していて良かったこと

この問いの回答は多岐にわたるため、主な意見を紹介するととどめる。

- ・アニメや映画の動画を見ていて、なんとなくポルトガル語が聞き取れた。
- ・地下鉄のアナウンス⁵が聞き取れた。
- ・地元にあるポルトガル語で書かれた看板の意味が分かった。
- ・ブラジル人の友達とポルトガル語で話すことができた。
- ・SNSでつながっているブラジル人のポルトガル語の書き込みが理解できるようになった。
- ・(ブラジル人の) 親戚とコミュニケーションが取れた。
- ・授業の映像で日本に住むブラジル人のことを知ることで、より理解が深まり、さらに関心を持った。
- ・ブラジルの文化や社会を知り、視野が広まった。
- ・スペイン語やフランス語と似ていた。

すべての学生がこの問いに対しては「身の回りのポルトガル語が理解できた」や「ブラジル人とポルトガル語で会話できた」など、具体的な回答をしていたので、どの学生も2年間のポルトガル語の授業によって得られたものがあり、その成果を実感しているのではないかと思う。特に東海地方では身近に存在するポルトガル語であるからこそ、生活面で勉強の成果が感じられ、それがモチベーションにつながっていくのではないかと考える。また、ポルトガル語そのものよりも、ブラジルやブラジル人に関しての知識が増えたことに良かったと答えた学生が多かったが、複言語の授業はその言語を学ぶのは

当然として、その言語を取り巻く環境や状況を知ること重要だと考える。そのため、このような感想を持つ学生が多くいたという結果には非常に嬉しく思っている。

5. 今後の授業課題

2017年度の授業結果を踏まえ、次年度以降の授業方針や課題を述べたいと思う。

名古屋外国語大学の学生は英語の知識に深く、文法に関しては英語と比較して説明することによって理解度が増すと考える。実際、中級で行ったアンケートの感想にも、英語の文法と対比することで覚えやすいところがあったという意見があった。英語にない概念が多いため、難しさが際立つという欠点もあるが、逆に英語との違いや類似性に関心を持ち、一層ポルトガル語文法への興味を感じてもらいたいと願っている。

もともと受講目的がはっきりしている学生も多いため、ポルトガル語に対する意識も比較的高いと感じるが、授業の中で在日ブラジル人や日本人のブラジル移民について映像を見せることで、なぜポルトガル語が身の回りにあふれているのか、なぜ日本にブラジル人が多く住んでいるのかについて考えてもらい、ブラジルやブラジル人への関心をさらに高めてもらえる授業としていきたい。そしてその授業がポルトガル語学習の意義について再確認、そしてさらなる意欲につなげるものとなってほしい。

2017年度は文法と会話が同じ曜日に行われていたため、学生は週に一度しか学習機会がなかった。そのため次の週になると前回の授業の内容が抜け落ち、学習した事項の定着がしづらかったように感じる。そのため、少なくとも最初の30分は宿題の答え合わせも含めて前回に学習した内容の復習に充てていた。2018年度は時間割の関係上、文法と会話が別曜日になるため、学生には週に二度学習する機会が与えられることになるが、引き続き復習に重点を置くことで、学習内容がしっかり身に着くようにしたい。また理解度を確認し、半期ごとのテスト以外に、小テストや単語テストを定期的に行うことで単語力や文法の定着力をつけさせたいと考えている。

6. おわりに

ポルトガル語は世界でも話者人口が多く、日本でも身近にあふれている割に、一般的にはマイナー言語とみられがちで、日本では学べる機会があまり多くない言語である。しかし東海地方では使用頻度も多く、生活の中で身近につかえる言語でもある。そのため複言語教育において、学生がポルトガル語を学習する意義は非常に高いと思う。そして最終的には、学生がポルトガル語学習を通じて、ブラジルやブラジル人への知識をさらに深め、日本に住むブラジル人との多文化共生に関心、理解を持ってもらいたいと思う。またそうした結果を得られる授業運営をしていきたいと考える。

注

- ¹ また、ポルトガル語を母語とする人口は約2億5千万人だが、そのうちブラジルが約2億人の人口を抱えている。そのため日本で出版されているポルトガル語参考書もほぼ全てがブラジルポルトガル語の文法を元に作成されている。
- ² 主にDVDは『NHK世界遺産100』、『世界の車窓から』などを使用した。
- ³ ブラジル移民については『その時歴史が動いた 移民は共存共栄の事業なり～ブラジル移民100年～』（平成20年6月18日）、在日ブラジル人については『O Outro Lado do Mundo 軌跡～在日ブラジル人の25年～』（Roberto Maxwell）などで紹介している。
- ⁴ 法務省の統計によると2016年末時点で在日ブラジル人数は180,923人。そのうち愛知県には51,171人、静岡県26,565人、三重県12,445人、岐阜県10,381人居住し、東海4県の在日ブラジル人の合計は100,492人となっている。
- ⁵ 2017年12月まで、名古屋市営地下鉄東山線の車内でポルトガル語によるアナウンスが流れていたが、現在は終了している。